

| | |
|-----------|--|
| Title | 7 : 新規臨床実習プログラム「審美歯科入門コース」 の概要と学生からの評価 |
| Author(s) | 亀山, 敦史; 春山, 亜貴子; 田中, 章啓; 石田, 圭太; 山下, 慶子; 鈴木, 桜花; 杉戸, 博記; 佐藤, 亨; 山下, 秀一郎; 古澤, 成博; 齋藤, 淳 |
| Journal | 歯科学報, 115(5): 474-474 |
| URL | http://hdl.handle.net/10130/3883 |
| Right | |

No.7 : 新規臨床実習プログラム「審美歯科入門コース」の概要と学生からの評価

亀山敦史¹⁾, 春山亜貴子¹⁾, 田中章啓²⁾, 石田圭太¹⁾, 山下慶子³⁾, 鈴木桜花²⁾, 杉戸博記¹⁾,
佐藤 亨¹⁾, 山下秀一郎²⁾, 古澤成博¹⁾, 齋藤 淳³⁾ (東歯大・保存)¹⁾
(東歯大・パーシャル補綴)²⁾ (東歯大・歯周)³⁾ (東歯大・クラブ補綴)⁴⁾

目的：本学では平成26年度（第121期生）から水道橋病院を主な拠点とした臨床実習がスタートした。これにあわせて水道橋病院保存科臨床実習では、第3学年保存修復学で履修した審美歯科領域の知識をさらに深める目的で、ジーシーコーポレートセンターでの学外シミュレーション実習を導入した。今回はその概要を紹介するとともに、平成26年度に受講した学生からの評価をもとに、その導入効果を検討した。

方法：平成26年度は水道橋病院保存科または総合歯科に配属された臨床実習生、計140名を対象に実施した。1回につき11～13名を後期実習中にジーシーコーポレートセンター（東京都文京区）に引率し、午前中は歯の漂白に関する知識を再確認するとともに、各自で用意した学生自身の上顎模型を用いてホームブリーチング用のカスタムトレーを製作した。午後は矮小歯を模した人工歯を用いてコンポジットレジンダイレクトベニアの実習を行うとともに、実習で用いた器材の詳細やその使用方法について講義を行った。なお、平成26年度は本実習を計12回、旧口腔健康臨床科学講座（水道橋病院総合歯科）に在籍する各2～4名のインストラクターが担当した。

保存科・総合歯科後期臨床実習の最終日に、参加した学生に対して本実習に関するアンケート（記名任意）を実施し、検討を行った。

成績および考察：140名中137名が回答した（回答率97.8%）。うち1名は、実施当日に病欠で参加しなかったため集計から除外した。漂白の知識の理解を深めるのに「効果的だった」と回答したのは104名（76.5%）、「やや効果的だった」と回答したのは31名（22.8%）であった。またレジンダイレクトベニアの知識を深めるのに「効果的だった」と回答したのは108名（79.4%）、「やや効果的だった」と回答したのは26名（19.1%）、いずれの質問についても「効果がない」と回答したのは皆無であった。指導内容について、「分かりやすかった」と回答したのは123名（90.4%）、「まあまあ」と回答したのは12名（8.8%）であった。

漂白の実習については、漂白の実体験をしたいとの意見も複数認められたことから、今後は疑似体験できるような工夫も必要であろうと思われた。

以上の結果から、本実習は臨床実習で遭遇する機会の少ない審美歯科治療について、その知識を深めるのに効果的であり、臨床実習の内容を補完するのに有効であると思われた。

No.8 : 純チタンのグレードの違いと表面処理が疲労特性に与える影響

鈴木 薫¹⁾²⁾, 高野智史¹⁾²⁾, 武本真治¹⁾³⁾, 上田貴之²⁾, 吉成正雄¹⁾, 櫻井 薫²⁾ (東歯大・口科研)¹⁾
(東歯大・老年補綴)²⁾ (東歯大・理工)³⁾

目的：純チタン製のインプラントが破折する症例が稀に認められる。これは咬合力による繰り返し荷重を受けることで、インプラント材料が疲労を起こすためと考えられている。純チタンはグレードが高くなるにつれ、強度は大きくなるが、一方では展延性が低くなるため、各グレードによって疲労特性が異なる可能性がある。さらに、インプラント体にはオッセオインテグレーションの獲得のために様々な表面処理が行われているが、これらの表面処理は疲労特性に影響を与えている可能性がある。そこで本研究は、純チタンのグレードの違いおよび表面処理が疲労特性に与える影響を明らかにすることを目的として、グレード2（G2）およびグレード4（G4）の純チタンの疲労特性を検討した。

方法：直径3mm、長さ17mmのG2およびG4の純チタン丸棒（東京チタニウム）を試料とし、それぞれ機械加工群（MS）と表面処理群（SLA）とに分けた。表面処理はアルミナショットブラスト（250～300 μ m）および塩酸と硫酸による酸エッチングを行った。各群において静的荷重試験における降伏荷重（静的降伏荷重）および繰り返し荷重試験（疲労試験）における降伏荷重（疲労降伏荷重）を計測し

た。静的降伏荷重は万能試験機にて各群5本計測した。疲労降伏荷重は各群20本の試料を用い、ステアケース法による疲労試験（10⁶ cycle, 10Hz）から計測した。また、静的荷重試験および疲労試験を行った試料に対し検鏡試験を行い、静的降伏荷重については二元配置分散分析を行った。

結果および考察：静的降伏荷重はG2のMS群が672.4 \pm 51.2N, SLA群が724.1 \pm 99.9N, G4ではMS群が1088 \pm 93.9N, SLA群が1118 \pm 96.3Nで、表面処理の有無による差は見られず、G2-G4間のみで統計学的に有意差を認めた（P<0.05）。G2の疲労降伏荷重ではMS群が473 \pm 81.8N, SLA群が560 \pm 68.0Nと、両群とも静的降伏荷重より約30%減少し、G4においてはMS群が620 \pm 58.2N, SLA群が675 \pm 50.9Nと、両群とも約45%減少した。検鏡試験において、疲労試験後の試料で引張側に亀裂が観察されるものが認められた。

これら結果より、表面処理の有無に関わらず、G4の純チタンはG2と比較して、繰り返し荷重により降伏力の低下する割合が大きいことが示唆された。